

Fellowship's Miscellany



『ディケンズ鑑賞大事典』の刊行を終えて

Editing *The Reader's Encyclopedia of Charles Dickens*

西條 隆雄

Takao SAJO

ディケンズ・フェロウシップ日本支部が全力を注いで編集した『ディケンズ鑑賞大事典』が今年5月に刊行された。いい出来栄で、読書子にうれしい話題を振りまいている。一緒に作業に取り組んでくださった編集委員、執筆者、暖かくサポートして下さった会員諸氏、そして南雲堂に感謝しつつ、編集のよろこびと苦闘を語ってみたい。

1. 企画のはじまりと編集委員会の設置

1999年1月に支部長職を引き受けたとき、前支部長の小池先生より「これまで貯めてきた300万円を新しい世紀の記念行事として何かに使ってほしい、多分出版などがいいでしょう」との提案を受けた。支部活動電子化の作業に忙殺されながらも、いったいどんな企画がもっともふさわしいだろうかと日々考えつづけていた。数人規模で書く研究書とか、デ

ィケンズについての随筆集では、支部として長いあいだ積み立ててきたお金を生かすことにはならない。専門家も一般読者もこれを読めばディケンズのすばらしさを理解することができるような書物ができれば、これほど適ったものはない。生涯と作品論はもちろん、想像力の源泉や朗読、演劇、ジャーナリズム活動も視野に入れた、国際レベルでディケンズを語ることでできる、いわば『ディケンズ手引書』のようなものは作れないであろうか。折りしも *The Oxford Reader's Companion to Charles Dickens* (1999)、次いで *The Cambridge Companion to Charles Dickens* (2001) が出たが、日本の読者にはこの両者ではまだまだ不十分、個別項目をもっともっと詳しく、かつ資料を示しながら解説したものでなければならぬ。

一見無謀に思えるこの企画も、支部創設後30年を経た今、その実現は

さほど難しくはあるまいと考えた。ただ、それには豊富な資料を手元にもち、直言しかつ献身的に働いてくれる編集委員を募る必要がある。幸い植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治氏がこの仕事を快く引き受けてくれたので、2002年12月に執筆要綱を作成し、30名の会員に執筆をお願いした。5名の編集委員はいずれも研究室を自分の仕事場にしており、したがって連絡に困ることはない。編集の方針を協議したり、原稿の点検とか抜け落ちた項目に対する目配りなどは電子メールを使ってほとんど瞬時に行うことができた。記述の正当さと『大事典』全体の均質さを保つことが編集の第一義であり、この考えを共有する編集委員会が設置できたのは成功への大きな一歩であった。

2. 取り上げる項目と内容

『大事典』の目指すところは、ディケンズの幅広い活動のすべてを網羅することであった。彼は作家としてあまりに有名であるが、それ以外に素人演劇活動をおこない、日刊新聞を創刊して『タイムズ』紙を震え上がらせ、自作を朗読し、週刊誌を編集刊行して大成功をおさめている。いわば、数人分の生涯を一身で生き、しかもその一つ一つに輝かしい成功を刻す、たぐい稀な人物であった。この巨大なディケンズ像を一目でとらえることができるよう、全体を6つの大項目（生涯、作品論、想像力の源泉、多岐にわたる活動、ディケンズ文学の広がり、ディケンズ批評

の歴史）に分け、その下にさらに小項目を入れてディケンズを詳しく解説することにした。

この多才な人間像をとらえるには多くの研究者の協力が必要であった。とくに「ディケンズとシェイクスピア」、「ディケンズとドストエフスキー」、そして「19世紀の大衆娯楽」についてはわが国の研究ではいまだ未成熟だと判断し、欧米の研究者にお願いした。一方、作品については、各作品ごとに批評史を記述し、作品のテーマ・特徴をうまく解説して、文芸批評用語に振り回されず、作品の魅力伝えることに重点をおいた。

また、この種の事典にありがちな「作品のあらまし」、「作中人物」、「地名」の解説などはすべて本体と同列におかず、CD-ROMに収めて付録とし、このほかに「ディケンズの家系」、「分冊出版表」、「作家の交友関係」、「ロンドン地図（1823, 1843, 1862年）」、「研究文献」等もいれて、本体に劣らぬ情報を大量に提供することにした。これによって『大事典』の本体を、付録とは別の、ディケンズのコアを語るものとして位置づけることができたかと思う。

3. 出版社の選定

もともとは文科省の出版助成を目指し、全原稿が出揃った時点で出版社と交渉するつもりであった。しかし出版社未定の企画に対して原稿を書くことはできないとの意見が出され、助成はその段階であきらめざるをえなかった。

出版社の選定は、企画が実るか実

らないかの試金石である。編者の意向が執筆者に無視されれば『大事典』の名とはほど遠く、個々の論文が独立し統一のない書物になってしまう。編者を介さずに執筆者が直接出版社と連絡を取りあう非は未然に防がねばならない。私は良質な編集、装丁、製本で名高い南雲堂の原信雄氏に手紙を書き、お会いして『大事典』の出版を打診した。最初は「原稿の寄せ集め」の類ではないかといぶかっていた彼も、企画の目的、取上げる項目、そして執筆・編集の方針を詳細に説明したところ、「前向きに考えましょう」と約束して下さった。ディケンズ・フェロウシップ日本支部の総会（2004年10月）で出版社名を公表したとき、ほとんどの人は「まさか」と思ったか、しばらく沈黙が流れた。かくして南雲堂の協力により、編集委員会は方針どおり編集作業をすすめることができたのである。

実際に組み始めてから完成するまでに、原信雄氏は踏むべきかずかずの手順と私の気づかぬ盲点を無言で教えてくださった。とりわけ完成前の数ヶ月は、私などの想定できぬめまぐるしい作業がつづき、彼の指示に従ってあれこれ奔走しているうちに、現在目にする美しい『大事典』が突如できあがっていたのである。いい出版社と編集部長に恵まれたことを感謝している。

4. 搬入の準備

CD-ROM に収めるロンドン地図3葉の著作権取得はうまく進んだものの、そのデジタル化は大変だった。原英

一氏も松岡光治氏もこれは自力では無理だというし、私にはデジタル化の知識も制作依頼をする業者の当ても無い。地図をはずす手もあるが、それでは大切な資料が一つ欠ける。財政的裏づけのないまま作業は何とか進めて行かねばならない。2003年の暮れにやっとある業者を見つけ、制作を依頼した。年明け早々に出来上ったが、高額な制作費を支払ったにもかかわらず、解像度を相当上げねば使い物にならなかった。やむなくそれをお願いしたが、データが大きくなればなるほど費用もかさむ。読者に一次資料を提供したいという自負だけが心の支えであった。障壁画のデジタル化を可能にする大型スキャナーが京都で開発された記事を新聞で見たのは、2004年4月末のことだが、すでに作業は終わっていた。

面倒な作業が一つ一つ片付く中で、原稿がほぼ集まった2004年5月、編集委員は原稿の中身の点検に踏みこんだ。同時に、執筆者が使用しているイラストの掲載許可をとり、委員会で急遽収録することを決めた「ディケンズとドストエフスキー」の論文の掲載許可をとり、そして天理図書館所蔵のディケンズ分冊本の表紙絵複製許可を申請した。

とりわけ「作品」の部に関しては、体裁、批評史の概略、テーマの解説などが各作品ごとに統一されているかどうかを確かめ、そうでない場合は訂正、加筆を求めた。30余点の原稿はその後執筆者と編集委員の間を何度か往復した。原稿点検には時間がかかる。ほぼ最終原稿が整った

2005年3月末、編集委員会は同志社大学の小会議室をお借りし、必要な文献をここに揃えて、3日間にわたる合宿会議を開いた。

この会議で見つかったいくつかの不備は再度執筆者と打ち合わせることにしたが、この時点でまだ1、2原稿の遅れがあり、すべてが出揃ったのは夏休み明けの9月であった。しかしこの時期で原稿搬入をしても、教科書等の出版で多忙を極める南雲堂に『大事典』最優先の指示をお願いすることはできず、年度内刊行は見通しがあやしくなった。

5. 印刷開始

2006年3月末に数ページのサンプル組みが3部とどき、これを比較検討して書物の体裁、1ページの行数、使用活字を決定すると、初校は早くも4月30日に刷り上った。これを執筆者に校正してもらおうと、再校は7月13日～27日（ここで「作品」の部に収めた地図がことごとくやり直しの指摘をうけ、オランダへ行く直前のこと、家内に「イラストレーター」を使ってすべて描き直してもらった）、三校は8月31日～9月4日と、急ピッチで『大事典』の形が整ってゆく。最終校正刷りが9月19日に届くと、この段階で全ページを確定し、以後はこれをいじらないことにした。この確定したページに従ってインデックス作成が開始される。あらかじめ個々の執筆者に作成してもらっていた索引を一本化して7項目に整理し終わると、これを最終校正刷りとともに原英一氏に郵送した。そして

南雲堂よりお借りした『大事典』のファイルをベースとして、単調だが厳密さを要求するこの作業を彼にやっていたいくことにした。

しかしこの段階で南雲堂より思わぬ不備を指摘された。執筆者の使う言葉がまちまちなので、誰か一人で全体を総点検してほしいというのである。二つ返事で引き受けたものの、見直すべき語句は相当多数に上り、ページの変更を伴わずにこれを統一してゆくのは骨が折れた。しかもこれはインデックスに連動する。原英一氏も同じ悩みを抱えていた。同じ概念が、言葉をたがえて同席しているのである。加えて、たまたま目を通したCD-ROM内にも本体との齟齬がいくつか見つかり、宮丸裕二氏を説得し、1ヶ月の猶予を与えて担当部分を見直してもらった。その間、奥付け、執筆者一覧、「あとがき」の作成にとりかかり、原英一氏からインデックスが送られてくると、直ちにその整理・訂正に集中し、年内に組版ができることを祈って南雲堂に送った。卒論・修論指導、博士論文査読に忙しい中をどうやって切り抜けたのかわからない。ともかく1月末にはインデックスの校正を終えた。終わるとすぐ宣伝パンフレットの文面作成、函のデザインがつづく。作業は果てるところがない。

6. イラスト

用いた図版はすべて巻末に出所をリストするという南雲堂の意向を受け、各執筆者の用意した図版および編集委員が追加したものは、す

べて典拠を調べ、版権の必要なものについては所蔵する図書館・博物館に問い合わせ、複製許可をもらい原画のコピーを送ってもらった。幸い *Charles Dickens by Pen and Pencil* (1889-91) および Charles Dickens 版全集は個人でもっていたので、これを存分に利用できたのは有難かった。版権には無頓着な執筆者もいて、複製許可をもらってほしいとお願いすると使用をあっさり引込めた。また、許可を得ていると主張する人には正確を期してその証明書の提出をもとめたところ、「こんなにいるのか」と驚きつつそれをもらってくれた。しかし「イラストは任せます」という人が多かった。イラストの拾い出しは容易な作業ではない。もっている蔵書をすべてひっくり返してふさわしいものを見つけ、また不鮮明なものとは相当に差し替えをおこなった。

『大事典』の函にはマクリースの描いた肖像画 (1839) を使うことにし、2007 年 2 月に Charles Dickens 博物館に問い合わせたところ、館長から「これは私の管轄外なのでどうしようもありません。National Portrait Gallery でもらってください」との返事があった。急ぎ NPG と連絡を取り、何とか 4 月はじめに許可と原画のコピーが届いてホッとしたが、出来上がってみればなんと肖像画は函の表のみに使用すると思っていたのに裏表紙と背中にも使われていて、大至急、変更に対する是正策を尋ねた。さいわい 1.5 倍支払えば許可できるとの連絡をもらって安堵の胸をなで下ろ

したが、それは 5 月 23 日、配本の 2 日前のことであった。

一方見返しの地図は *The Oxford Companion to Charles Dickens* とは異なり、これも資料の一部、つまりロンドン中心部の地名や街路名が読めることを念頭においた。柏書房の無償掲載許可には深く感謝している。いくつかの作品は個別に地図を作成する手間も省けた。今のうちに CD-ROM をていねいに剥がして地図が利用できるようにしておくとい。

5 月に日本英文学会が開催された折、南雲堂の展示ブースに『ディケンズ鑑賞大事典』が並び、内容の濃さと美しい装丁が参加者の目を引いた。以前から作りたいと思っていた本がようやくできあがり、支部記念事業の名にふさわしい貢献ができたことを素直によろこんでいる。編集委員会を代表し、5 年の長きにわたり努力をおしまず『大事典』を完成させた編集委員の皆さんに感謝しつつ、その功績を讃えたいと思う。

なお、CD-ROM に入れた地図は次の 3 点である。

1. *A Guide through London and the surrounding Villages* (London: M. J. Godwin, 1823)
2. *A Street Map of London 1843* (Devon, UK: Old House, [originally published by Chapman & Hall], 1992)
3. *Stanford's Library Map of London and its Suburbs* ([1862]; Suffolk, UK: Harry Margary [in association with Guildhall Library London], 1980)

The CD's CD-ROM Was Not Built in a Day.

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



今から 5 年ほど前のこと。『ディケンズ鑑賞大事典』刊行の話が出たとき、ディケンズの作品に出てくる人名や地名の数は膨大であるから、主要なものに限定せざるを得ないだろうと思った。だが同時にこうも考えた。『大事典』に CD-ROM をオマケとして付ければ、人名や地名は網羅できるし、ディケンズと交友のあった人々、分冊出版や年譜や系図といった表の形になるもの、すでに相当な分量となっている国内外のディケンズ関連の文献、クリックして拡大・縮小できる地図、これらも電子媒体としてならば、いくらかでも格納できるだろう、と。それで、編集委員会から付録 CD-ROM の制作を任された筆者は、さっそく計画・立案に取りかかった — 辛酸をなめることになるとは思ってもせずに。CD-ROM の中身は、表紙と目次を兼ねるトップページ (index)、使用方法などを書いた手引き (readme)、データベースの全てを収めたフォルダ (data) の 3 つにすることに最初から決めていた。ファイルの形式についても、テキストはコピー＆ペーストと改竄を防止するために PDF で、画像はウェブ上で標準的な JPEG または GIF にしようと

思った。

CD-ROM 制作班は『大事典』本体の執筆者になっていない若手からということで、春秋に富んでコンピュータ操作に優れた 5 人を登用した。目次は 9 つの項目からなる。それぞれの項目は CD-ROM 中の 9 つのフォルダ、すなわち「粗筋」(18 人の日本支部会員によるコラボレーション)、「人物」(宮丸裕二氏)、「地名」(西垣佐理氏)、「交友」(野々村咲子氏)、「分冊」および「年譜」(武井暁子氏)、「系図」(矢次綾氏)、「文献」(筆者)、そして「地図」(『大事典』に不可欠なデータということで、制作班とは別に尽瘁していただいた西條隆雄氏)に対応している。

さて、この種の大辞典に一般読者が求める情報の中でトップに来るのは、作品の粗筋ではあるまいか。ディケンズの研究者 (あるいは大学の先生) にとって決して愉快なことではないが、悲しいかな、これは否定しがたい事実であろう。ひょっとすると一般読者の場合だけではないかも知れない。ディケンズの作品論を書いた数年後に、端役の人物や細かい粗筋が思い出せなくなっているのは、50 歳になっても天命を知らない